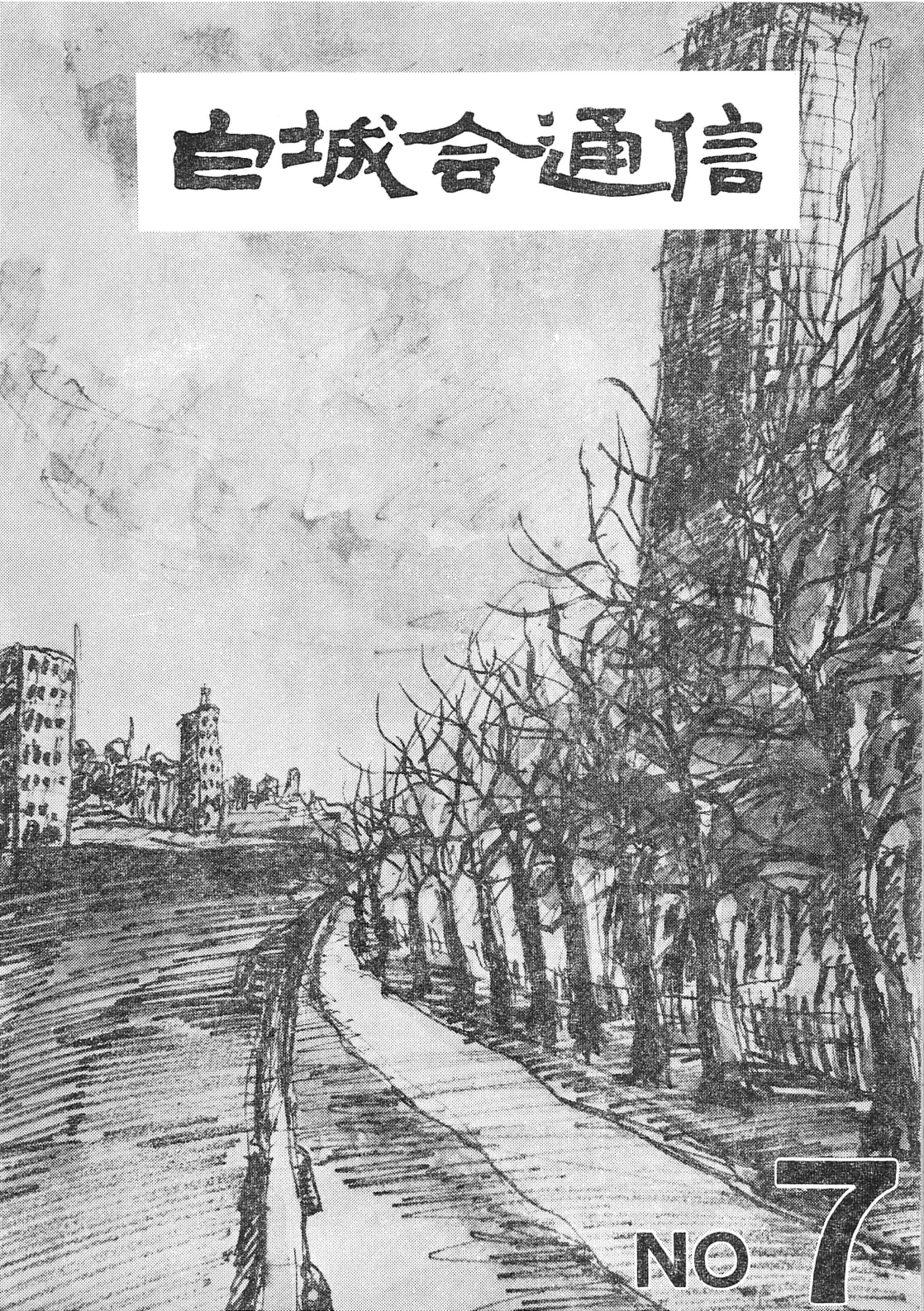
白城合通信



NO 7

ごあいさつ

理事長　空地純一（姫中24回）

同窓諸君お元気ですか。時節柄くれぐれも摂生を怠らないで下さい。

さて、お待かねの白城会通信第七号が予想外の立派な内容でお目見得しました。関係各位に厚く御礼を申上げます。私は平素よく好きな書物、この「通信」もその一つですが座右に置て読み耽ります。出てくる数々の楽しい思い出にすっかり頭の疲れがとれてゆくのです。皆様方も読んでしまえば用はないなどといわないでどうか後々までも有効にご利用下さい。発刊のご挨拶を書くに当って久々全号に目を通して見ましたが、最初の頃は何と申しても白城会記事が目立ちますね。会館の由来、建設の事前計画、資金の調達、その他関連した諸問題の慎重な検討、資金に目処がついて安心して着工、軈て竣工して、記念式典があげられる、その後の花々しい利用情況の報告、次いで会員多年の待望であった「鷺山に秋の」歌碑がたちました。よくもこれだけ順序よくなされ且つ報道されたものよと当時の責任者の一人として、実に感慨無量のものがあります。次で多いのは新旧会員諸兄の想い出の記でしょう。石坂先生の「姿を変えた母校訪問記」など、よんでいる内にいつの間にかその昔通りなれたお城周辺の小径を辿ってやがて、母校に来てはみたが余りの変り方に呆然と立ちつくしている自分の姿らしいものを見る心地がするではありませんが、いつ迄も変らないのはあの白鷺城の雄姿でしょう。栗田先生をとり囲んでの母校懐旧談、さては座談会、母校の戦中戦後の歩みなど、どんなお気持ちでお読み頂けたでせうか。功成り名を遂げて悠々自適の大長老から、各界の枢要の地位で活躍中の皆さんから、さては元気発剌たる青年諸君から送って頂いた数々の音信がよく当時の母校の有様から世相にもふれて実に感慨深いものがあります。うら若い女性の身で日本海外青年協力隊の一員として遠くアフリカにわたり彼の地の青少年を直接指導されという経験談は頭の下る思がしました。アメリカ留学における一考察は私達老人にまで新しい組織を吹こんでくれました。この度の第七号は上出来だったと自負していますが、いずれ劣らぬその道の権威者の筆になる姫路の今昔、池大雅、白鷺城を描いてなどどうか読み落さないように願います。その他沢山のご寄稿に対し心から御礼申上げます。旧姫中生まれてここに九拾余年、卒業生一万六千三百名、内物故会員三千六百人を超えその他の方々の多くは、毎日母校の思い出に励まされながら元気にご活躍中とお察し致します。

さて皆様くだらぬことをかき綴りましたが、栗田先生のおあとを継いで理事長に就任してから早くも二十年、この間一向お役にも立たず慙愧の至りに堪えません。変転極りなきこの世の中にあっては、常にその変化に適応した一層価値ある新しい活動が期待されております。軈て八十歳を迎えんとする老兵、この大切な時にミスをしてご迷惑をかけたくありません。今こそ潔く消えて行くべきだと思うのです。切に皆様方のご賢察をお願い申上げてこの稿を終ります。

本部からお願い

副理事長　安平　康（姫中38回）

今年も白城会総会が近づいてまいりました。八月十六日午後三時からでありますので、是非多数ご参加下さるようお待ちしております。戦後、本会が姫中校友会から白城会にと改組発展しました経過については会員の皆さんもご承知のところでありますが、この間、栗田前理事長、空地現理事長の誠に並々ならぬご苦労がありました。何分にも一万数千名におよぶ多数の会員、しかも一世紀に近い卒業生の年代、いわゆる明治、大正、昭和と高齢の会員から新進の青年会員までを包含する本会のことですから、その年齢差を乗り越えて先輩と後輩とが有意義な親しみのある話合いの場としていくこととのためには、会員の皆さんが希望される最大公約数を選んでご満足のいく方向に運営いたさねばなりませんが、なかなか並大抵のことではありません。幸いにも会員の皆さんのご理解と姫中、西高という絆のもとに良識をもってご協力下さったので、今日の成長と組織づくりができたものと信じます。

今、私達本部役員が協力していることは、来春を目標に新しい白城会名簿を発行することであります。会員の皆さんの消息を正確に伝えることは本会の懇親の根幹でありますから、どうしても正確なものとして発行したいと努めておりますが、数少ない本部役員だけでは到底力がおよびませんので、会員の皆さんはもとより、各支部、各期クラス会の役員諸氏に御協力をお願いして縦からも横からも調査の上、その完璧を期したいと念願しております。どうかよろしくお願いします。

また、白城会通信も先輩後輩をむすぶ大切な絆であり、話合いの場でもありますので、短篇でも結構ですから一人でも多くの方のご意見なり近況を掲載したいと存じております。これまた、よろしくご協力をお願いします。

入会の挨拶

柳川洋子（西高22回）

西高を巣立ってもう半年、大学生活という新しい環境に今ようやく親しみと余裕が持てるようになりました。ふと気づくと外界は若葉が占領し、すがすがしい夏が訪れております。「早いものだなあ……」時の流れと、その間に生じた変化に驚きつつも、私達はもう西高時代をなつかしむ時を迎えているのです。この懐古の情を胸にいだいた時、その者は白城会の一員としての資格を得たと言えるのではないでしょうか。今ようやく私も白城会員としての自覚を新たにしているのです。

この半年「西高出身」という言葉をいったい何度口にしたでしょう。そのたびに多くの先輩方と知り合い、名も知らず、顔も初対面。しかし話の合う喜び―、校舎を、恩師を語るなつかしの一時―を経験したものです。

異邦の地で知るこの絆、この歓言―これらすべてがこの言葉で始まるのです。「私は姫路西出身です」「いや私もですよ」多くの先輩の方々、新しい会員をよろしくお願いします。

私の観る姫路

高橋　秀吉（姫中28回）

私たちを生み、育んでくれた姫路の土地は、その名こそ女性的だが、あらゆる角度から眺めても実に全日本中でも、一つの大きなポイントの性格を現わしている地点である。そしてわれらの終生絶ち切れぬなつかしのふるさとでもある。

歴史も古く、各時代にそれぞれの足跡を残し、国家の上にも大きな動きのあり、土地そのものが、時の人々へ数々の知識を開いてくれ、訓えをたたえてくれたことも多い。

時勢は刻々に進み、環境とした大自然や、人工的の造成物も変ってゆく。どのような想い出でも、何か具象的な背景でもあれば、より強く、その当時を偲ばれるものである。そこで記録や写真等がその用を足してくれ、これによって一層より確かに、各時代のその当時のありのままの姿も、永遠に残り、またそれが学術上にも大きな参考資料ともなるものだから一枚一枚の写真とても仲々すて難いものである。

想えばわが姫路は風土もよく、昔の制度からも播磨の中心地であり、住む人々の歴代営々開拓して、よく土地を生かせて生産につとめて、今日の繁栄のもとを築いてくれたことも大きく住民へのよき訓えと励ましを残し与えていることをも後世のものとしてよくその恩を謝し、その功績もつとめて顕彰せねばならない。こうして事物人物共に何かでその業績を如実に示した写真類が残っておれば、さらによりよくわかるものである。

こうしたことは、どの人にも、きっと心の内にあるものだが、実際にはまだまだ、こうした保存、分類方面にまでとは、あまりに多くの用件や日常家庭行事の忙しさに、つい失われてゆくことが多いものである。

少なくとも、私たちが生まれた明治以来の百年の歴史をたどっても、その資料として探しても、罹災の大厄に傷つけられたことにもよるが、惜しいものが失われている。

私は父祖からの意志をついで、幼時からの目的にそうような方針を以て、この種に関する写真や、絵画、地図、文書、書籍等の収集と保存に心よせて、あらゆる機会にこれにつとめて来たが、積もりつもって写真類だけでも約三十万点を超すにいたった。もちろん、私の今までにも盗難や近火災害の上に空襲による戦災もうけたので、相当多くのものも失ったが、いくらかは疎開、分散したのが助かり、戦後は毎日のように各所を撮しているから、なおなお数は増してゆくだろう。

特に戦後の姫路のあらゆる進歩発展は施設行事共に著しい激変があり、長らくふるさとにご無沙汰した人が、久しぶりに帰って来ても、サッパリ方角もわからぬほどである。いや現にこの地に住んでいるものにしても、年一年遠ざかってゆく明治時代は、大きくわが日本にとっても、まさしく画期的な時だったから、地方都市のこの姫路にも、街頭にもよくその気風が見られ、少なくとも大正末まではよく見られたものだった。

明治の末十年あまり前に、生をうけている私個人にも、凡てが見るもの聞くものが今は想い出の種となり、当時の写真等からも様々にくり出される想い出となつかしみが湧きおこるものである。先輩知人友人にも、来訪に

当って、たとえその一枚を見てもらっても、何れもなつかしげに話し出されて、つくづくと眺められるのを考えると、一枚にしてもよく人の心を慰め明かるくしてくれることが痛切に感じられる。

そこで、これをみながみなの公開出版は第一経費が、とても大きくなって、私一人の貧しい世帯では、それこそ破産である。

せめてその内の百枚でも地区項目別にしてお目にかければとの念願で、まづ手始めにと、「明治の姫路百景」を出版したわけである。できれば、写真も活字も大きく、ゆったりした場面にし、紙質も明かるく丈夫なのにして、特に老人には読みやすくしたかったのは山々だが、それにはこれまた約十倍の経費となる。世にはよく縮刷版というのがあるが、私のはその逆に行き方をとった。とに角、できるだけ世に広め、永く残すのが大事なので、私として最少限の方法を採らねばならなかった。

それでも保存、収集と撮影の継続は、私一生の奉仕と思って、三度の飯を二度にしてでもとつとめているのである。

私も短かい一生をたどるからには、あまりにも多く、世間から蒙った御恩のお返しには、せめてこの道によってでもと、徒らに死蔵することなく、つとめて機会をえては、かかる古写真への執着は続けたい。そこで取あえず、明治の姫路を語る資財として一通り選び出したのである。ただ、それまでに一応下書きの分をサンダ印刷主人の三田忠氏の厚意をうけてその機関誌に連載した版を少し改めて刷ってもらったので、見た目には順序不同、どの写真も面を縮めたのも、つとめてページを少なくしたのも、みな冗費を節したからで、とても見にくい、不体裁なものになったのもやむなき次第である。

大体、私の幼い日露戦前ころは、ほとんど業者の写真屋にまかせて、時には出張してもらって人物や記念の会合を写してもらい、まだ一般的には個人ではカメラを持たぬのが通常で、自転車と共にまだ普及していなかった。

戦後にはようやく、当時のハイカラが何百人に一人ぐらいが自転車にのりだしたり、箱型の重いガラス板の六枚一組のを仕かけたカメラをブラ下げて、あちこちと写しまわったのは、みなで珍らしがられ羨まれたのだった。

家庭にカメラとは大正になっても仲々マッチしていなかった。よほど必要か、物ずきものが、カメラを持ち特別視されていた。父が素人ながら絵が好きで、それが延長して、割に早くカメラを手に入れて、写していたのを、子供の私が見よう見まねで、時々使っていたが、元より幼ない考え方だったから格別にあとに残すようなものもなく、はじめはホンのオモチャ位にしか思っていなかった。

その内に、父が旅行に私を連れて出る時は、重いカメラは面倒だとて家に残し、丁度そのころからこれも戦後の流行として顔を出してきた名所エハガキに目をつけ、その地の代表的な場所が写されているから、とてもその地の名所のみなまではまわりえないからとて、行く先々で買ってくれた。そして長じてゆく私もいつしかに写真や絵ハガキに興味を覚えてきて、次第に自分でも買い集めだした。

中学生時代には、絵ハガキも増したので、これを並べて見ていると学習研究にもよい資料になると感じてきた。そしてカメラも、以前の重々しいのに比べて軽便なのが、割に安くして売られだしてきた。それでも子供には一円二円でも高かった。やっと名刺型の小型の箱型の中古品を四拾銭で買ったのは中学二

年の時だった。これもやはりガラス板の原板は六枚一組だったから、その度に写真屋で取りかえてもらって、現象焼付を頼んでいた。

わが家を中心に市の内外を写し回ったのだが、失敗の作も多く、ガラス板の原板ではあとの保存もかさばり厄介なもので、これも後の罹災で焼いたので、ごく僅かにしか焼付けの分は残っていない。

中学卒業後二年後には、私も小学校に勤めだした。それは大正九年で、その時代には、カメラもベスト版のフィルム八枚どりのものが流行し、いわゆるカメラマンも相当多くなったものの、まだ誰でもが持つほどでもなく、写すといえば、通る人が立止まったり、子供達が集まって写してくれと珍しがられた。

ポケットにでも入る軽便さに、これを持ってから私のカメラ熱は一段と激しく、写す数もずっと増してきた。その時の勤先が、まだ郡部であった水上村の小学校だったから、家から自転車で通うには、当時の城下街の姫路市を南北に貫いて走っていたから、時には通る道も東へ、西にと変えて通ったので、道々に見るこれはと思うのを写してきた。

人口が三万台のころの姫路は、軍都の色彩が濃くても、まだ世相も土地も静かであったし、昔風もよく残っていた。私も、このころから写真の保有と収集の重要性の感が強まったので、にわかに写す数も増してきた。以来カメラを常時手放さぬようになり、筆やペンに次でいるのは、もう五十年も続いている。

明治百年の声が高まったのを機会に、いつしか私も老後に入り、一まづ満七十歳を迎えた記念にもと、明治に因んだ姫路写真を選び百景として印刷にした。

自費出版の情けなさから、まことにミミッチイ、せんべいより薄い本ではあるが、相当回顧のたねには十分だと信じるのをあげて見た。私も今までにずい分多くの方におせわや教えを蒙っているからそのお礼にもと進呈に全国に配布した。おかげでその反響も大きく各方面の送先から喜ばれたお便りもいただいている。命つづけば大正、昭和へと数も増してお目にかけたいとは今の私の念願である。

（高橋文庫主宰）

池大雅について

佐々木米行（姫中32回）

大雅が七歳のとき、宇治の黄檗で衆僧の前で大字を書いて、僧達を驚かしたという逸話があるが、これは本当のことである。

七歳神童大張に書す
筆は長く身短くして妙相当
幼齢なんじの能く此の如きを愛す
比すべし禹称曽って章を作るに

右のような黄檗の呆堂和尚の、大雅に与えた賞詞が残っているのである。この賞詞によると、大雅の幼名を池野又次郎といったことも分るし、体の小さなのに筆が長く見えたとあるからその場の情景も想像出来て面白い。中国の禹称少年の

ことを調べる資料が手許にないが、章とあるから文を作ることがすぐれていたのであろう。中国からわが国に帰化した杲堂和尚によほどの感銘を与えた書であったと思われる。

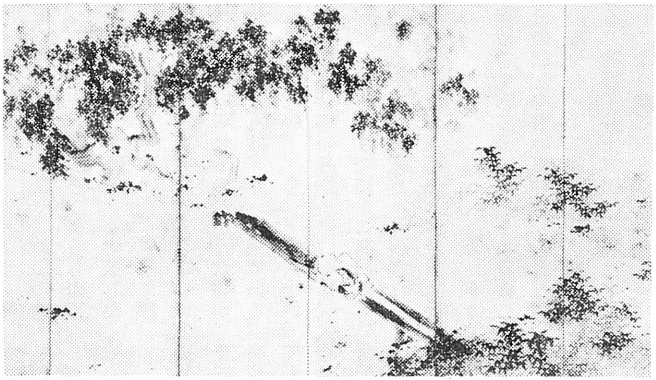
この杲堂の偈の幅の裏面に、大雅三歳の書の「金山」というのがはってあった。それを大雅の門人であり、後援者でもあった大阪の木村蒹葭堂が所持していたことが、蒹葭堂の記録に残っている。この記録によって、「金山」の二字も大雅の書であると信ぜられるのであるが、三歳の書が残っていることは、非常に珍らしいといわなければならない。「金山」の二字から、後年の大雅の高い書の趣を想像することは出来ないが、三歳で、すでにこうした書をかいていたという事実は、大雅が如何に天才であったかということの証明になると思われる。

中国の宋の司馬光が、宰相をやめて後、独楽園というのを作って、その園記を書いている。その独楽園記の中間の部分を、十二歳のとき大雅が書いたのがある。池野子井十二齢書と署名しているので、十二歳の書であることが、はっきりしている。そして、その頃子井と号していたことも分る。この十二歳の書は、目を見張るばかりのものである。十二歳の子供の書とは思われないような味わいのあるもので老成した書家に譲らないほどのものである。どうして、このような書が、十二歳の年少で書けたのか不思議である。高度の書の趣を内に包んだ書は、大人といってもなかなか書けるものではないのに、大雅のこの書を見ると、すでに、非常に高い書の境地に達した筆致があって驚かされる。十二歳位の子供が筆をもった場合、上手に書こうとか、どんな風に書こうとか、何か意識するものがある筈であるのに、大雅のこの書については、そうした点が感じられない。この時分からすでに、大雅の筆の息遣いというものを感じとることが出来る。私は、大雅の画でも書でも、それがなされた息遣い、すなわち、内面に燃えている本当の心というものを、窮めるために終始して来たので、こうした息遣いということをいうわけである。大雅のような天才になると、少年時代から、すぐれた個性といったものも、十分示した作品が出来たのだということが出来る。

京都の縄手通りに「赤万」という売薬商があった。由緒のある家であったらしく、そこの主人を井上泰山といった。泰山は、大雅を非常に尊敬していて、大雅にとっても泰山は、心をゆるした仲であり、また大切な後援者の一人でもあった。その赤万の薬の看板を大雅が書いている。「諸病通治、家方」とあって、その右寄りに「風薬のんでなをらぬ風の薬」と書いた看板である。「風薬のんでなをらぬ風の」で切って、「薬」と読むと意味が通じるが、棒読に、読みくだしてしまうと、一寸とまどうもので、いかにも、皮肉がかった看板である。今の時勢では、読む人が首をかしげて意味を考えなくてはならないような看板は無いかと思うが、当時の、のんびりした世情が覗えるというものであろう。この大雅の書を板に彫った看板が赤万には、大正のころまであったということであるが、今は、看板の所在は不明である。大雅の書いたこの看板の原本は幸に残っていて、高い書致の大雅の筆を観賞することが出来る。この書は、まことに、堂々たる風格の書で、おおら

かさが横溢したものである。大雅の晩年に近い書で、看板の原本といったようなことは忘れて、大雅の書の醍醐味にひたるといっては、必ずしも当てはまらないが、とにかく、いつまでも向い合っていたいような書である。

井上家と大雅との関係を知る資料は外にも色々あるが、このことは別の機会に譲る。とにとく、泰山は大雅に対して格別の心入れをもっていた人であるが、大雅の妻玉瀾に対してもそうであったらしく、大雅歿後八年経って玉瀾が亡くなったが、泰山が玉瀾の墓を京都の黒谷の墓地に建てている。泰山の大雅に対する厚い心が、その室玉瀾にもおよんでいることに深い感動を覚える。



柳下童子図　屏　風　（部分）

池大雅美術館に柳下童子図の屏風がある。これは国の重要文化財に指定されているものであるが、大雅の作品中、類少い図柄であり、また傑作である。大雅は青年時代から写生をしっかりやっている。この図を見ても、大雅が、物それを正しく写していることがわかる。柳を中心にして、小笹の葉が水に映っている。水に映った影を描いたものは、大雅の作品にも、他に見出すことが出来ない。橋の上に二人の童子がいるが、その下の水の中には、えび、めだかが泳いでいる姿が心にくいほどうまく描いてある。二人の子供のうち、前の子供は非常にきびし顔いをして、えびをとらえようとしている。後の子供はのんびり笑っている顔である。大雅がいつもそうしているように、余白がたっぷりとってあって、まことに、のびのびした春の図である。中屏風の小さな画面であるにもかかわらず、距離をとって見入ると、大きな景観がそこに展開する。如拙道人の筆になろうという意味の書き入れがしてある。如拙道人の「ひょうたんなまず」の画意になろうということだろうと思われるが、如拙の図は、瓢箪を持った異相の人物が水際に居り、その瓢箪で鯰を捕えようとしている図で、この図の解説によると、「ひょうたんでなまずを捕えるという禅の公案を描いた図」と書いてある。大雅の柳下童子の図は、写実の上にたっているが、しかし、大雅は捨てるべきは捨てて、省略したものが描いてある。余白には、深厚な芸術の心を漂わせて、いわゆる高度な文人画である。しかも、禅味が内包されていて、大雅がいいたいと思うことのすべてをあらわしたものということが出来る。

私は、大雅の作品を解説する場合、自分の感じていることが、どうしても言葉でうまくいえないことを非常に残念に思う。同じように文章で書くことも、到底うまく出来ない。大雅の柳下童子の図についても、長い時間その前にたっていて、自分のあたまにひらめく

ものに、うなづくようなものがあるだけである。私の書いた解説は、大雅の深い画意の何十分の一もいい得ていないと思う。

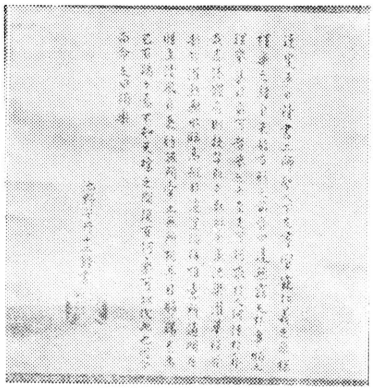
昭和三十四年十二月に、池大雅美術館を作ったが、四十一年五月財団法人組織にした。私が集めた池大雅の遺墨や関係資料を展示して、ながくこれを後世に伝え、出来る限り多くの人に大雅の芸術を知ってほしいとの願いからである。私は二十四、五歳から大雅の研究をはじめて、四十年余りをこえる年月を経たわけである。少しづつ積み重ねた研究が、大雅に関する色々な知識として、自分の身についているが、私は、何よりも大事な基本の条件の上に立たされている。それは、池大雅美術館に展示する限り、大雅の真蹟でなければならないということである。大雅の作でないものを展示することは、どうしても許されないことだと信じている。しかし、私は大雅ではない。大雅でない私が、大雅の作品が一〇〇パーセントわかることは不可能である。だから、私は大雅の作品の審定ということは、非常にむづかしいことだと思っている。私はこのことを十分自覚して大雅の研究をつづけている。

田能村竹田が、自分の書いた「山中人饒舌」という画論の中に、大雅の門人で、大雅堂三世をついだ月峰の言として、次のようなことを書いている。

「自分の師の大雅先生の作の出来のいいものと、偽作の出来の悪いものとについては、その判別は容易であるが、師の作品の出来のさほどでないものと、贋作の出来のいいものとでは、判別が困難である。偽物の出来のいいものを大雅先生の真作とすることは、やむを得ないこともあろうが、先生の真筆でかんばしくない出来のものを偽とすることは許されない」

概略右のようなことである。大雅作品の真偽の判別は、弟子月峰をして、このようにいわせたほど、当時、すでにむづかしかったようである。私は、大雅の作品の鑑定家ではなくて、研究家なのである。私は、この美術館が、数百年も、あるいはそれよりもさらになが く続いて、大雅というすぐれた芸術家のあったことを後々の多くの人に知ってほしいと思う。私は大雅という人間の真実をきわめなくては大雅の作品はわかるものではないと思っているから、そのことについて、一生懸命勉強している。そうすれば、自信をもって、そして正しく作品を選び出すことが出来ると思う。私は純粋に、しかも謙虚な心構えをもって、大雅の作品と取り組んでいるが、一方では、この美術館に展示している大雅の作品は、私が自信をもって陳列していることも本当である。謙虚さをもって研究しなければ進歩しないが自信を失ってはいけない。日々進歩するよう心がけ、そして自信を深めて行きたい。

（大雅美術館館長）



姫中時代の友

――ひと昔前の日記から――

桔梗利一（姫中36回）

一、不思議な縁〈昭和31年9月某日〉

人恋しく、友恋しい。恋しいのは女などにはいない。みんな男である。そのような年令になってしまった。

今、窓の外には秋雨が降っている。日曜日の夜半で、今まで読んでいた或る人の随筆集を、もうぼつぼつ閉じて寝ようかと思っていると、その本の終りのほうに「酒を飲めば、ほろほろとして、すべての人がなつかしい」とある。そこで、こんなことを書きとめる気になった。

今日はたまたま女房と映画を見に外出して、帰宅すると、留守居していた末娘が「お父さん、中学時代に永井さんてお友達があった？」と聞く。「ウン、あったよ。お父さんと同じ野球の選手だった。もう三十年以上も会わんけど、それがどうしたの？」と問い返すと、こうである。

私たちの出かけたあとへ、若い娘さんが一人訪ねて見えて「私、永井といいますが、父が姫路中学時代にお宅のお父さんと同級だったそうでございます。それで、一度伺ってみろといわれたので参りました。私はJ大学に行っていますが、直ぐそこの寮に下宿しております」と仰有ってひと先ずお帰りになった、と娘はいう、そこの寮というのは私の家のすぐ近くで、女子学生寮である。

「へえ！」と私は驚いた。

永井茂雄にちがいない。姫路の同町内（東二階町）に住み、小学校から中学校へと共に進み、学問も運動も、しのぎをけずった仲である。城南小学校では成績一、二を競った。中学では忽ち私は彼に引きはなされたが、四年の終りに二人は一緒に広島高師の試験を受けに行った。私は落ちたが彼は合格した。その当時は一高や三高に入るよりも難事とされた広島高師に、しかも中学四年から合格するなど珍らしいことだった。私などはヒヤカシに行ったみたいなものだ。「永井の息子が高師を受ける。お前も負けるな」と、私を買いかぶった親父の手前、私は、受かる筈もない広島へ出かけたまでのことである。

その翌年私は神戸の関西学院文学部英文科などという安易なところへころがり込んだのだが、それ以後三十有余年、学生時代も社会へ出てからも、お互いにすれちがいで、全く出会ったことはない。その間に彼の弟（久次君）も私の弟（五郎）も戦死した。この弟同志がまた小学校からの同級生だったし、また野球の選手でもあった。幼ない頃に共に学び遊んだ弟同志が戦死し、兄同志が生き永らえている。まことに妙な気がする。もちろん、兄同志も戦争に行ったのだが、幸か不幸か生きて還って来た。

そして、そのわれわれ兄同志のその片一方の娘さんが東京の大学に来て、しかも、私の家の直ぐ近くの寮にいるという。何という不思議な縁であろう。

そこで、夜になって早速その娘さんを拙宅に招待した。清楚で、聡明そうなお嬢さんである。

「私、この春からそこの寮に来ているのですが、夏休みに九州に帰省しましたとき、父の姫中時代の同窓名簿が届きまして、父がそれを見ますと、たまたま桔梗さんのお宅と私の寮の番地とが同じだったというわけで、それで父が、是非お訪ねしてみろといいましたので——」

そして、三十有余年会わぬその友、永井茂雄は、九州の佐賀で高校の校長をしているという。

幸福そうなその娘さんの顔を私はしげしげと見ながら、遠い昔の友がなつかしく、秋の夜の話はいつまでも、つきなかった。

（その後、お嬢さんはどこか他の寮に移られたのか、いつとなく見えなくなり、永井茂雄君も一度上京したときにわが家を訪ねてくれたが、それからはどういうわけか、ぷつーんと音信が絶えた。こちらから出しても、年賀状一枚来なくなった。どうしているのであろうか、案ずるばかりである。彼の消息をご存じの方があったらお教え願いたい。）

二、自殺した友〈昭和32年5月某日〉

上野の美術館へ国画会の展覧会を見に行った。いわゆる「国展」である。

上野の山の桜はすでに散り果て、花見客とてないが、地方から修学旅行に上京した中学生の団体バスが幾台となく風薫る五月の陽光の下に土煙りをあげながら、ひっきりなしに往ったり来たりしていた。見ると、バスの窓に頭をもたせかけてグッタリと眠っている中学生が多い。強行軍のスケジュールのせいか、のびてしまって、折角の東京見物も夢うつつといった恰好である。

その日は招待日である。国画会会員の尾田龍君と大淵武夫君との二人から同時に招待状をもらっていたので、これはどうしても足を運ばねばならなかった。幸いよい天気で、暑いくらいだったが、しかし、上衣を脱ぐほどでもなかった。

会場に入って行くと、第一室に大淵君が、誰かと立話をしていた。その傍に寄って行き

「やァ」「どうもー」と久濶を叙した。

「尾田君がその辺にいる」

と大淵君がいう。

「ヘェ、尾田、わざわざ上京してるの？」

「ウン。ちょっと探してこよう」

そういって、すぐ尾田君を見つけてきて、三人はそこでしばらく立話をした。

尾田君と私とは姫路中学時代の同級生で、彼は東京の美校を出てから母校（現在は姫路西校）で図画の教師をしている。会ったのは幾年ぶりであろう。大淵君もやはり姫中出身だが、私達より一年先輩で、東京に住み絵筆一本で生活している。国画会でも相当の古顔である。

両君に案内されて、各室を順々に見て歩いた。両君がいろいろ説明してくれるので鑑賞に一段と興味が乗って、たのしかった。

各室を全部見終ってから三人は地階の食堂に降りて行き、ビールを飲みながら、中学時代の話や、その後の友人の動勢などを語り合った。大してえらくなった者もいない。大学の教授とか高校の校長程度が多い。私達の中学時代は「末は博士か大臣か」というのが立身出世の最高のようにいれていた。博士になったのも幾人かいるようだが、今日では、博士の値うちなど大したものではない。

「たとえ高校でも、先生としてのちゃんとした定収があり、それで好きな絵もかいていられるなんて、うらやましいようなもんだよ」

と私は尾田君にいった。すると、大淵君が横から、

「尾田君は、先生をやめても、たんまり恩給がつくんだよ」

と、これもうらやましそうにいった。
「誰でも、他人がよく見えるもんだ」
と、尾田君はテレながら、
「君こそ、文芸春秋でのんびりしてるんだろう」と私にいった。
「とんでもない。三十七歳で戦争に引っぱられ、カエリテミレバイエモナシ、家は焼かれていてさ、揚句にパージになったりして、踏んだり蹴ったりだよ」
と、つい愚痴が出た。すると、尾田君は、思い出したようにいった。
「そうそう、●●が自殺したよ」
「なに?●●が、あの●●●●が?!」
私は、アッと驚いた。
●●と私とは、姫中時代はもちろん、彼が早稲田大学を卒業して社会に出てからも親しく交際した仲だったが、戦争が二人を遠ざけてしまった。彼は昭和十二、三年頃に台湾に渡り、終戦で引揚げてきてから、故郷の姫路に落ちついたらしいが、思わしい仕事もなく、その後は駐留軍の要員になっていたとかで、零落してゆくおのれの姿を友達に知られたくなかったためか、私にもずっと音信不通だった。
人間五十年、ここまでとにかく生きてきて、今さら自殺しなければならないなんて、一体如何なる事情があったのであろう。
「奥さんが買物に出て帰ってみると、首をつって死んでいたんだそうだ」
単なる生活苦からだという。いかに生活が苦しかったからとはいえ、なんとかならなかったものか。首をつるなんて!
私は二人の友に別れて、上野の山を降りながら、若かった中学時代を回想しつつ。
「朝に紅顔を誇るも夕べには白骨と化す」
という蓮如上人の「白骨の御文書」の言葉を思い出していた。

三、弟の同級生〈昭和33年4月某日〉

人間、誰でも、困れば悪いことを考える。考えてもそれをおさえるのが人の道である。困るというのは、大体において金銭のことである。そのために、人をだましたりする。
戦後の混乱期はお互いにみな苦しかった。食うか食われるか、相手を食わなければ自分が食われる、よしっというので親しい友達までをも、だましたりした。終戦の翌年大陸の戦地から還ってきた私は、ぼやぼやうろうろしていたため幾度だまされたかしれない。
しかし、のんびりとだまされてばかりいたから却ってよかったようなもので、そのおかげで、昔からの良き友に、いつまでもつき合ってもらえて、せめてもの心安らかな日を送ることが出来ている。一度でも友達をだました奴は、そのときは一時よかったろうが、今では誰にも相手にされず、人の目をはばかって苦しい生活をしているにちがいあるまい。
ある日、女房から会社へ電話がかかってきた。
「Sさんという姫中時代のお友達がいらっしゃっているのよ。どういたしましょう。今夜はお早いんですか」
丁度夕刻前で、ぼつぼつ帰ろうかと思っていたところだし、Sといえば、中学どころか小学校も同じで、幾年ぶりかと思うと、なつかしかった。
「すぐ帰るから、待つようにいってくれ。古い友達だからなァ、大事にして、とりあえずビールでも出して、ご馳走を頼むよ」
そういって私はあたふたと帰宅した。ところが、豈はからんや、SはSでも私と同級だったSではなく、弟の同級生だった。私が早のみこみしたのも悪かったのだが、相手はその辺を初めからぼかしていたらしい。
「ああ、弟と同級でしたか。それにしても、まァ、よく来てくれました」

ちょっとバツがわるかったが、そういわざるを得ない。

「丁度この近くまで来ましたので、先輩に敬意を表しようと思いまして。それに、五郎さんのことなどもお聞きしたくて――」

戦死した弟のことなどいわれてみると、

「それはそれは、よく訪ねてくれました。何もありませんが、まァゆっくりしていって下さい」

そういって、粗酒粗肴ながらも、と叮重にもてなした。久しく接しない故郷の話や、古い友人達の近況などを聞くのも嬉しかった。

しかし、そう親しくした間柄でもなく、先方も別に用があって来たわけでもないらしいので、女房に命じて適当なところで御飯を出し、お茶など飲みながら何ということもない話をかわしていた。

話は上手で、盛んに私をおだてたりする。そのうちゴロッと横になり、手枕でしゃべっている。私はアレアレと思いながらも、まさか帰れともいえず、いいかげんに相づちをうっていたが、十二時近くになっても悠々と寝そべったままである。

「あのう、君、もうぼつぼつ電車がなくなりますよ」

と、それとなく帰宅をうながすと、

「泊めてもらえませんか。行くところがないんです」

と、しやァしやァとしている。

私は少し腹が立った。

「初めから行くところがないならないで事情をいってくれれば、こんなせまい家でも泊めてあげるのだが、弟の話など持ちだして調子のいいことをいい、飲むだけ飲み、食うだけ食って、あげくに――」

そういっているうちにムカムカしてきた。

「そう親しくもないのに、一体、君は何のために来たんだ。あまりバカにするなッ？」

私としては珍らしい。女房が、まァいいじゃありませんか、とかなんとかいうのもかまわず追い立てた。相手は何もいえずに、ほうほうの態で逃げ出して行った。

あとで聞いたところによると、その男、姫中の同窓会名簿をたよりに昔の友人や先輩を訪ね、飲んだり食ったり、果ては泊ったりした揚句に、翌朝「実は姫路へ帰る汽車賃もないので」といって、何百円か何千円かをせしめて行くのが常習だったそうである。

東京にはこういうのが、うろうろしているらしいが、それにしても姫中出身にこういう人間がいるかと思うと、甚だ残念である。

（十年ひと昔前の日記から拾い書きしてみた。暗い話ばかりになって後味悪いが、与えられた紙数も尽きたので――。又の機会に筆を新たにしたい。

（文芸春秋嘱託）

『新会員名簿』発行の予定

消息をお知らせ下さい!!

わが白城会の団結の源は何といっても名簿です。先輩と後輩、友と友を結びつける見えざる絆は名簿です。たえず流動しつづける会員の動きを何とかしっかりとつなぎとめていたいと思い努力しています。

住所や職場をお移りなった方、結婚によって姓や住所のお変りになった方、是非本部までお知らせ下さい。

白鷺城を描く

小野　勉（姫中50回）

東京美校油絵科を卒業してすぐ上海第一日本高女の美術担当教師として赴任していた私は、終戦により昭和二十一年一月に内地に引き揚げることになった。持ち帰れる身回り品は重量、内容等きつい規制をうけたように記憶している。

せめて内地へ帰ったときの用意にと愛用のスケッチ箱その他をリュックにつめて文字通りのからだ一つで呉淞（ウースン）より佐世保まで米軍のＬＳＴ船にのり、朝方に内地に着いた。デッキにかけ上がって見ると目前に青緑の山々が浮かんでいた。まのあたりに見る祖国がそれこそ目にしみるようであった。

内地の様子が全然わからないまま上陸すると、断片的に情報が耳にとびこんできた。私の故郷の姫路も空襲で丸焼けになっているという。私は町もお城も焼けてしまったのかと不安な気持ちで夜行列車に乗った。うす暗い車中は窓ガラスがあちこち破れまことにすさんだ感じである。驚いたことには三人連れの若者が寒さよけのため散乱している紙くず等をよせ集め車内の通路でたき火をはじめた。一月十七日の早朝に私は郷土姫路駅のプラットホームに降り立った。瞬間に見たものは一面焼け野原のかなたの朝もやの中に悠然（ゆうぜん）とそびえる白鷺城の姿であった。故郷（くに）へ帰ったんだという実感があった。その時の感激と興奮が私と白鷺城を結びつけることになった。

郊外の自宅に落ちついてまもなく姫路時代の恩師の勧めで鷺城中学というお城の真下にある学校に奉職することになった。大手門のすぐ前に建てられた引き揚げ者住宅に居を定めることになり、白鷺城を描く生活がなんとか始まった。中学時代の恩師の描かれたお城の印象派風の作品に接して感心し、一種のあこがれに似た気持ちをいだいたことも動機の一つとなったかもしれない。それから白鷺城を描きつづけて二十余年、まったく「バカの一つおぼえ」のように自分でも性こりもなく続いたものだと思う。

城はいかにも空間にどっしりと存在している感じで、量感にあふれている。ことに朝夕が美しい。暮れなずむ空に向かって立つ城はもはや単なる建物ではなく、生きていて人間に万言のことばで語りかけるかのようだ。時間の流れに刻々とその表情を変えてゆく。新緑の城、桜と城、その表情は常に動いている。

そのころは外側から全景を描くことが多く、お城を軸としてあたかもコマが回るようにあらゆる角度から描いてみた。全景をねらうと城はあまりに整った美しさを見せて、ともすればまとまりすぎるきらいがあった。そこがかえって一つの大きな壁になりさんざん苦慮した。

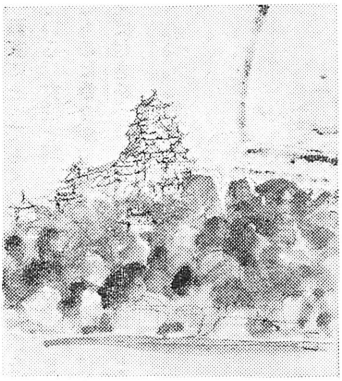
ちょうどそのやさきのある年の新緑のころ著名なＫ氏が城を描きにこられ滞在されていることを知り、友人と二人でＫ氏をホテルにたずね作品を見せていただいた。そのざん新な画風とがっちりとした構成に驚嘆させられ非常な刺激をうけた。Ｋ氏は姫路にこのようなよいモチーフがあるのに、地元にあまり描く人がないとは不思議に思えるとも語られたので、心を新たにさらに本格的に取りくむこ

とになった。

やがてお城の「部分」に興味をもつようになり、城内をたずねることが続いた。描きに出かけるときは、画材の七ツ道具をひっさげて行くわけで、百号ぐらいのキャンバスを片手に城内を登る。強風のときなどまるでキャンバスが帆かけ船の役目になり、風にほんろうされ吹きよせられて、石垣（いしがき）に張りついたようになってどうにも動きがとれなく困ったこともあったりした。

日展の出品作を毎年描いているが、七月ごろ制作にかかり完成するのが十月初旬ごろが例になっている。むっとするような暑さの中で、汗をふきふき制作を続けるのは、かなり体力を消耗する。疲労が重なったりすると、筆がもたつき一日かかってやっと石垣の中の石を二つ三つ描くだけのことに終わったりすることもある。幸い城内にはところどころに無気味なほど深い井戸があり底から冷風が吹き上げてくる。暑さにうだるとその天然の冷気で涼をとるだいご味も味わえたりする。

昭和三十一年七月より姫路城解体修理復元工事が五億三千万円の巨費を投じて開始され、関係区域は立ち入り禁止となり、いきおい城門とか土べいとかを主として描いたが、これらがまた、モチーフとして好適である。八年間、黒い素屋根にすっぽりおおわれていたのがベールをぬいで、再びその白亜の雄姿をみせたのは昭和三十九年の三月ごろであった。立ち入り禁止が解かれたのでかねて最も描きたいと考えていた大天守中庭付近を百号に描くことにした。壁が真新しく白一色になり、思ったより描きづらかったが、それでもその後三年間ばかりは、その付近の連作に終始した。やはりお城の壁などは歳月をけみして、しみがついたり自然に微妙な色調をたたえたものが魅力があるようだ。



白鷺城遠望

つい昨年七月ごろから城内の「ぬの門」を描いた。城内には大小合わせて二十一の門があるが、「ぬの門」はその中でも堂々たる規模で風格に満ちた二層櫓（やぐら）門である。面白い色合いをもつ白壁と、青味を帯びたしぶい瓦（かわら）、古い鉄板の色などがからみあって特異な色彩美を現出している。周囲をとりまく石垣の色がまたよい。天下の名城にふさわしく、秀麗な天守閣群に劣らぬ貫録と美しさをそなえている。門からの坂道を降りた「旧をの門」跡から描くことにした。そこには一かかえにあまるくすの大木があるので百号のキャンバスを結（ゆわ）いつけて描くことにした。少々の風があってもキャンバスがびくともしないので好都合である。

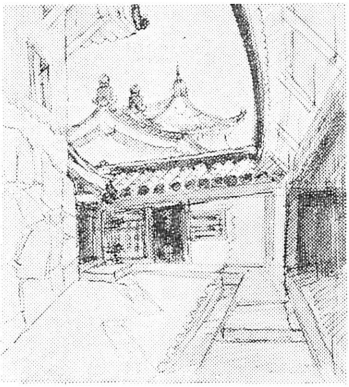
天守閣に登った観光客はすべて帰りに「ぬの門」をくぐって出てくる。私の描いている近くを通るので、いきおい絵をのぞくためにまわりをとりまくことになる。夢中になって描いている私に気軽に話しかけてくる。子供連れの人は子供に絵を見せながら、あれこれ子供に教えている。結構私の絵が手本の役目をさせられているようだ。閉門時に追われていらいらして描いており、問いかけに答えるいとまのない時などは、この絵かきさんつんぼらしいとつぶやきながら立ち去る人もいて、思わず苦笑させられたりする。

ある時には作品より描いている、私の顔やしぐさに興味があるのかまるで不思議なものでも見るようにじっと見つめている人もある。無意識の中にいろいろの表情や変わったしぐさをしているのであろうか。もう十年も前のことであるが、姫路で日展の開催されたおり、その用件でこられた高名な洋画家のN氏と同道してメーンストリートであるお城に面した大手前通りを歩いたことがある。そのとき、その画家は「このながめは全国でもめずらしい通りというより、むしろ広場の感じだ。フローレンスの広場、ノートルダムの広場とともに、世界の三大広場の一つだとも言えるのではないか」と語られたが、私は面白い見方だと思った。

この大通りも昨今では車があふれ、広場の感じはうすれて来ているようにも見えるが、駅から徒歩十分ばかりの距離にある大手門をくぐり三の丸広場を経て菱の門をくぐるとそこはもう城内で別天地の感がある。広大な城内は順路によって一巡するのに約一時間半もかかるが、その門その門が人々の心をとらえて飽きさせない。

海抜八十二メートルもある大天守六階までの道は地形の変化を巧みに利してあますところがなく、う余曲折、予期せぬ景色や建物が次々と展開して変化の多い美しさを見せている。年間約九十万人の観光客を広く内外から集めている白鷺城は、訪れる人の絶え間がない。現代のようなめまぐるしい時代に生きる人々にとって、古城はやはり心のふるさととして、多くの人の郷愁をさそうのであろう。

画家にとってもくめども尽きぬ画因を秘めている。女性と同じで見せかけだけのきれいなものは飽きがくる。お城はじっくり付き合えば付きあうほど味がでてくる。城ほど付き合いやすく、半面したたかなものはないと信じている。今も私は白鷺城と心中しても悔いはないと本気で考えているのである。



城内旧番所附近

（創元会々員姫路高校教諭）

（昭和四十五年二月十四日付日本経済新聞より転載）

白城会文庫目録追加分

著者	書名
内藤　道雄（西高5）	詩集レモンの崩壊
前田　正雄（姫中35）	芭蕉試論—奥の細道を中心として—
山崎　為人（姫中46）	句集　幻花
田中　敬三（姫中32）	私と人生（巻三）
椎名　麟三（姫中40）	懲役人の告発
河本　直文（西高18）	遺稿集二十才の告発
永井　一正（西高1）	アートディレクション
尾田　龍（姫中36）	尾田龍アフリカスケッチ
高坂　好（姫中42）	赤松円心・満祐
高橋　秀吉（姫中28）	明治の姫路百景
田村　善太（姫中55）	龍野醤油研究史料　第一輯・第二輯

タイ焼きの味

村田　年弘（西高3回）

テレビのなつメロばやりで、戦前や戦後の懐しい歌を聞いていると、十年、二十年のむかしが、一瞬によみがえってくる昨今だが、母校から機関誌の原稿依頼を受けて、ペンをとると、戦争直後だった数年間の学園生活が、まるで、つい昨日のように、まざまざと浮かんでは消えていく。毎年一回開かれる東京白城会で、姫路から上京された先生から母校の近況報告は聞く。しかし、みな酒やビールに気を取られて、せっかくの報告も、うつろにしか耳にはいらないのが正直なところで、ふだんは母校の印象は自分から遠い存在になっている。

いまの母校は、まったく新築されて鉄筋コンクリート建ての立派な校舎が並んでいるが、たまに訪れても、ぼくたちにはピンとこない。やはり、古びた校門、左右のサイドに植え込みが茂って、ところどころに大きなクスノキがたたずまい、ツツジの花がきれいだったあの風景が、いまも目に残っている。春浅いころ、小川のふちを歩いたり、ふき出た麦の芽を楽しみながら、はるかに白鷺城の雄姿を望んで登下校した時分の感傷を、まだはっきりとつかむことができる。当時は空気も澄み、交通公害もなく、登下校時の学校周辺の道路は、ぼくら学生だけであふれかえっていた。いま、すさまじい土ぼこりを上げて、学校裏手の田舎道をひっきりなしに突走る自動車の洪水を見ると、いまの学生や学校が痛々しい気がしてならない。

ぼくたちが学んだ戦中戦後の六年間は、いま思えば、たいへんな変革の時代だった。社会的にも、経済的にももわが国にとっては未曽有の大転換期に当っていた。近ごろ、若者の間で『体制だ』『いや、反体制だ』という言葉が流行語になり、また『激動の七〇年代』とも言われているが、当時の価値の転換に比べると、すべてコップの中のセクト争いのような気がしてならない。

ぼくたちは、終戦になる年の四月、旧制姫路中学に入学し、終戦、そして男女共学を経験して、新制西高を卒業した。いわば新旧にまたがる、時代の落し子である。

入学したときは、天下の姫中、のエリート性をたたき込まれ、自分でも、みながそう思い込んでいた。いまは新制広嶺中学へ譲り渡した『曲がり中』の校章が、いかにも神聖不可侵のように思え、背中に負うカバンにも大きくマークを墨書きして、得意満面と通学した少年時代を思い出す。慣れない手つきでゲートルの巻き方を覚え、道で先輩や先生に会うと、敬礼させられたこともあった。それよりも、新調の学生ズボンのポケットを縫い合わされてしまったのは不思議な気がしたが『真冬でもポケットに手を入れない姫中生の節度』を教えられ、少しも疑問に感じなかった。

学校には配属将校というのがいた。毎朝の朝礼には、いつも校長先生のすぐ横にふんぞり返り、軍人勅諭を朗読させられた。少年時代の、若い脳細胞にたたき込まれたことは、なんでもなかなか消えないもので、いまでも五カ条の全文を記憶している。真夏の日の軍事教練、割りに重かった三八銃の手ごたえ、学校裏手のイモ畑の開こん……。思い出は尽

きない。

しかし、当時が暗い、抑圧された時代だったのか、つらい、みじめな時代だったのか、当時のぼくたちには、なにもわからなかった。一気に過ぎ去った感じだった。ほとんどが軍人を志したし、ぼくも陸軍幼年学校へはいろうと思っていた。それがいま、新聞記者になっているのだから、時代の移り変わりはわからない。

終戦を境に、ぼくたちの周囲の環境も一変した。軍都姫路から軍人が姿を消し、チューリップのような帽子をかむった進駐軍やMPが、生まれて初めて、ぼくたちの目に強烈に焼きついた。先生の中にも、同じような服装をする人もいた。剣道や柔道がなくなり、帽子も、それまでの戦闘帽は廃止された。なによりも、姫路中学そのものが亡くなった。『価値の転換』という簡単な言葉では解決できない。大規模で多様な変革がぼくたちの世界を次々と襲った。

ある日、登校してみると、まったく異様な風景に驚いた。広い運動場の隅々に、なん百人とも数え切れないくらいの女学生が、三々五々と群れをなしているではないか。『学制改革で姫路中学がなくなり、姫中の半分と県女の半分が合併されて新しい学校ができる』と、一応聞かされてはいたものの、生まれて初めて接する女学生の大群に驚天動地の心地だった。『男女七歳にして席を同じうせず』—明治人の受けた教育ほど、ぼくたちは、がん迷な教育環境には育たなかったが、この時の精神的刺戟は、姫中生すべての血を無分別にかき立てたのではないだろうか。昨日までの天下の姫中の誇りと節度も、もう遠い過去のものになったように思えた。

フォークダンスとやらで、初めて女学生と腕を組んで踊ったときの照れくさかったこと。いまの若者には、もう想像さえできないことになってしまった。一年くらい前まで、三八銃をかついでいた手で女学生とダンスを楽しみ、軍人勅諭を唱えた口で恋をささやくようになったと好きな女学生に心をこめてラブレターも書いた。

当時のジャーナリズムが、この男女共学を社会的現象として、どう受け止めていたか、十分知ることができないが、七〇年代の今日のフリーセックスにも相当する大変革だったかもしれない。ケースは違うが、当時〝予科練くずれ〟と称する若者の不良グループが戦後の盛り場に出没したが、目的意識を失なった疎外集団として、現代のヒッピーと、どこか共通点はなかっただろうか。

混乱と動揺の中にも、新しい男女共学のもとで、ぼくたちは戦後の教育を受けていった。『文化国家』『民主々義』『平和主義』……などの言葉を耳にタコができるくらい聞かされ、それまで習得したものを完全に放棄し、整理もできないまま、ただヤミクモに新しいものを摂取していった。あまり学問に打ち込めなかったぼくは、好きだった歴史以外は真剣に取り組んだ記憶がなく、いまになって悔いることも多いが、かといって、戦争に敗けて急に英語に精出す気も起こらなかった。

そんなことより、先生の目をかすめて、ちょっぴり学校に反逆した非行の方が記憶に生々しい。正門のすぐ前にタイ焼き屋があった。だれが見つけるともなく、一人通い、二人通い出して、いつの間にか十人くらいの、〝タイ焼きグループ〟ができ上がった。ちょうど、職員室の斜め向かいに位置していたので、その店へはいるときと、出るときが難しく、昼休みの時間に、無理をしてよく通ったものだ。店の中へはいってしまえば、もう、〝おらが天下〟かで、甘さに舌つづみを打っ

た。まだ、甘さに不自由していた時代だったので、あの味は今も忘れられない。名は明かさないが、当時の首謀格の一人が、いま謹厳な高校教師になっているというから、おもしろい。

当時、なにか、ふっ切れない気持ちもあってか、時事問題研究会というサークルを始めた。十四、五人の部員を集めて雑誌を出版したり、年一度の文化祭に出展した思い出が残っている。新聞記者になってから、一度母校を訪問したとき、それが時事研究部として『部員募集』の張り紙を出していたのを見たが、自分が生み出したものだけに、うれしかった。いまは、どうなっているだろうか。

質実剛健と男女共学。この二つに、なんの矛盾を感じるいとまもなく、ぼくたちは卒業した。どちらも当然のことのように思い込んで……。しかし、べつに大時代的に考えるつもりはないが、この未曽有の転換期に夢多い青春時代を過せたことについて、ぼくはしあわせだったと思っている。

明治人の『古き、よき時代』は知らないが、大正人のように『おれたちに青春はなかった』と、グチをこぼすこともない。そして、明治人の気質も英雄主義も知っている。悲惨な戦争も体験したし、昭和元緑の浮薄と豊かさも亨受している。

ぼくは第一線の政治記者時代、多くの校友に仕事の関係で接している機会があった。『きみは、なん期生か』と聞かれた場合、相手が先輩らしいときは、旧制姫中で答え、後輩らしいときは、新制西高で答えた。われながら、変な気がしたが、事実だから仕方がない。

最近になって、戦後の六・三・三・四制の改革が、政府、識者の間で真剣に検討され始めている。中教審の作業も、小学、中学部門の検討まで進んだ。七〇年代に生きる人材を養成するため、どんな『期待される人間像』が描かれるかわからないが、いまのままでいいとは思えない。とくに、一昨年いらいの学園紛争を見ていると、いままでの大学自体が持つ問題の根深さは別として、浅薄で、一本調子で、思い上がった学生の思考と行動には、到底ついていくことはできない。同じ思想的混乱の中に育った世代として、その心情には理解もできるが、発想の方向があまりにも単純で、幼稚すぎないだろうか、いまの母校に「高校全共闘」の組織があるのか、ないのか知らないが、かりにあっても、対話してみたい気持ちは、まず起きないのではないかと思う。

会田雄次さんが『戦後の教育には、善意の強調がありすぎた』と、なにかに書いておられた。勇気があって、物わかりがよくて、民主的で、平和的な人間、そんな人間像ばかりが強く教育されすぎて、本当の人間教育が見逃されてきたのではないか。人間は勇気があると独断になり、積極的に行動すれば利己主義にも陥る。その両面を会得するところから、人間としての深さが生まれ、真実の歴史が形成されていく。要するに、キレイごとではだめだ。ということだろう。

いつの時代にも対応できる人間教育の規範はあるはずである。めまぐるしい戦中戦後に育ったぼくたちは、その規範をまさぐり求めながら、激動の七〇年代に生きていこうとしている。

（神戸新聞東京支社編集部次長）

新会員名簿発行予定

消息を連絡しよう

ヨーロッパとび歩き

高原　智子（西高8回）

午前二時のカイロ空港はつめたかった。東京を出て二十二時間、四十日の旅行の最初の入国手続である。ガラビアをつけ黒い髭の男や、上から下まで黒で覆われた女が空港の建物の付属物のように身動きもしない中を〝これは大変なところに来たぞ、帰れないかも知れないな〟と思いながら税関へ行く。制服で身をかためた職員は顔の中を催眠術でもかけるようにじっとのぞき込んでくる。外務省のコンピューターの故障でビザが遅れ、アラブ連合の入国は予想以上に手間がかかった。

現在のカイロは戦時体制で全てに不自由がつきまとった。平和な国から来た私達は言葉の不自由さに加えて行動の不自由さを歎かねばならない。一行の一人はモハメッド・アリ・モスクで写真を撮ろうとしてスパイ容疑で捕まり、フイルム没収、半日間警察で取調べられるという事態になり不吉な予感は当りつつあった。モスクだけでなく河川、橋の撮影も一切禁止である。美術館に入れば作品は土嚢で包まれて爆撃から守ろうと陳列どころではない。オールド・カイロで見かける人とは裸足でボロをまとっている。ピラミッドや素晴らしい彫刻、工芸品を創った先祖をもつアラブの人達の現実はまったく悲観的でいらだたしい思いがしてならなかった。

カイロからイスタンブールへ向う飛行機から見た地中海は、この旅行中感激した一つだ。〝このトルコブルーを見にはるばるやって来た〟と胸のすく思いであった。アジアとヨーロッパとの境界、幾多の歴史的なできごとをその景色の中に包みかくしたままカラリと晴れわたっている地中海は、東西交流に情熱をそそぎ込んだ先人達によって磨きこまれた海であろうか。

アテネに来てやっとヨーロッパに来たという感じがする。エジプトとギリシヤを結ぶ地中海の一孤島クレタにおこったミノア、ミケネ文明を見なければならない。国立博物館の種々の展示品は、この地に侵入し文明をつくった力と情熱を伝えている。近代美術の中で理解できないといわれるピカソですら壺に描かれた絵やタナグラの人形にその原型が見られるように思えてならない。美術館を出ると少女が追いかけてきて手を出す。陸続きの国々が戦争や略奪が絶えなかったのも原因かもしれないがアテネも例にもれず貧民族がアクロポリスの丘を静かに侵触していっている。飛鳥の里のような問題がギリシヤでも起っているらしい。巨大な遺跡にある戦争の傷跡は夢心地の旅行者を時々現実の世界へひきもどしてくれるのだった。

美術の宝庫イタリアに入国しローマのホテルに到着した時、町中が八日間のストライキだと聞いてがっかりしてしまった。重いトランクをさげてホテルに入ってもフロントにチーフがいるだけで泊り客がいらいらしてい

る。仕方なくテルミニ駅から地下鉄で近代建築の町エウルに出かける。オールドローマは保存用、観光用で官庁、商業、生活はこのニューローマへ移りつつあるようだ。ムッソリーニはアパートを残したといわれるように新、旧ローマの間は近代的なアパートが建ち並んでいる。

バチカンにはストがないと聞いてバチカン市国へ。ミケランジェロによって設計されたサン・ピェトロ大聖堂を中心にした小さな独立国はまさしく芸術品の塊と言えよう。システィナ礼拝堂の天井画「天地創造」「人間の堕落」「ノア伝」は荘厳でその迫力はどっと体をすくませてしまう。ミケランジェロ三十八歳の努力の結晶である。更に二十数年後に描いた「最後の審判」は空前にして絶後の巨大な作品でオペラグラスの中から圧迫してくる。超人的な制作に頭をかかえて、静かなローマの街を横切った。

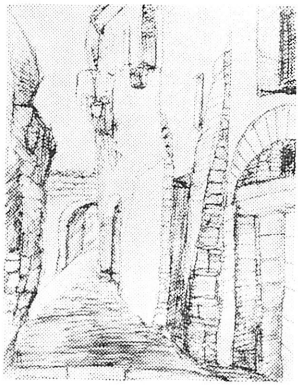
サンタ・ルチアからナポリ湾の眺めはバチカンの威圧感から比べてはるかに心地よい。解放感にかられてビュウティ・サロンへとび込み、さっぱりとイタリアン・カットでホテルへいそぐ。

ナポリからバスで三十分、ヴェスビオス火山麓のポンペイへ。火山の噴火によって埋没した廃都は当時の文明の縮図である。家々の壁には鮮やかな色彩の人物画、ディアナとアポロンの秘めごとなど官能的である。英語で案内するガイドも急に声を小さくして「女性はお待ち下さい」と小さな扉を開けて男性にだけ見せたり、文学におとらぬ感情があるらしい。

アッシジで一泊の後、古都フィレンツェにつく。朱色や黄土色の屋根屋根の美しい眺めのうちに十五世紀の美術館へ入っていくようだ。ボッチェリー、ミケランジェロの傑作を集めたアカデミア、ウフッツイ美術館、メヂチ家の墓へと夢遊病者のように街を歩きまわった。レオナルド・ダ・ビンチは十四、五歳から三十歳をフィレンツェで過し、「モナ・リザ」もフィレンツェで描かれた。ミケランジェロは青年時代から後年の彫刻の傑作を残しローマで逝った彼の遺体ははるばるフィレンツェに運ばれ、サン・タ・クローチェ聖堂に葬られた。静かで知的な都はまったくルネッサンスの美術館である。

ラヴェンナ・パドバを経てヴェネチアで、はじめて日本人グループと同宿する。ローマのバスの中で「日本が大変だ、大変だ」と言って知らせてもらったニュースの真相はヨド号事件であった。やはり日本人から聞かなければわからない。同時にその日の朝カイロ空港でイタリア学生が空港を撮影していて捕まったこと。トルコに地震があったこと。先の旅が恐ろしくなる。

夜のベニスは素晴しい。サン・マルコ広場で楽団が哀愁のこもった曲を水路や細い路地に流している。こんな路地を歩くのは旅ならではと感傷的になって歩く。路地裏ですばらしい歌声に足をとめ、中をのぞくと豪州の世界一周の観光団が招き入れてくれた。そこでは、歌手たちが高らかにカンツォーネを歌っている。歌のあい間にシャンペンで豪州人は気勢をあげたり「日本人か」とおあいそを言ったり、なごやかな雰囲気だ。歌が始まると

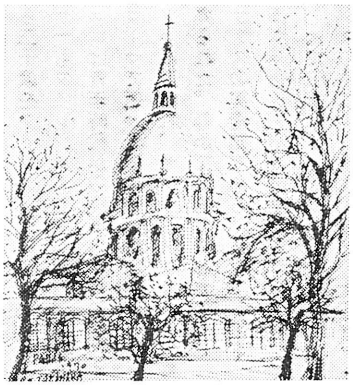


何と〝隅田川〟で思いがけぬプレゼントに日伊同盟ができあがった。次の日はスカンファーラ氏の計いで運河をゴンドラで流すことになった。アコーデオンに合わせたカンツォーネの歌声が高く低く運河の水を打つ様はこの世のものとは思えぬほどすばらしかった。

イタリア最後の地はミラノであった。第二次世界大戦の傷跡もいたましい「最後の晩餐」は近代の遠近法を最大限に生かした傑作である。守衛にチップ代りに趣味の記念切手を渡したところ、手をとって「ここで撮りなさい」と入口の方へ引き戻された。なる程離れて見れば、一つの部屋にかかっている絵がはっきりと分れて二部屋あるように見える。こういうチップなら何度でも出したい。

ミラノからスペインのバルセロナまでの空路はハンニバルのアルプス越えの逆である。一時間少々では昔の将軍の偉業もあったものではない。あこがれのスペインはカラッと晴れわたり、氷雨が降っていたミラノからあっという間に真夏の衣替えである。

早速夜はフラメンコとしゃれこんだ。世界中のお上りさんの一員に加わって東京のハトバスのように観光バスに乗ってナイトクラブを二軒ほどまわってくれる。



翌日スペイン村からピカソ美術館へ。美術全集にもない初期の作品から現在までを収めた小じんまりとした美術館である。路地を入った所にあるためか人影はない。特にギリシヤ美術を見て来た私にとってはヨーロッパの歴史の中を通じ、ピカソの存在する価値がはっきり現われてきたのは幸せであった。

夜はマラガで泊り、早朝グラナダへバス旅だ。アフリカ大陸の見える海岸線、山、オリーブ畑、茶色の山肌、単調な畑や山の連続でついつい居眠りの旅になってしまった。昼間の居眠のおかげでグラナダについた夜はサクラモンテの丘のジプシーのフラメンコ。手足の動きから臭気がただよってくる。宵っぱりの生活に無神経になっているのだろうか。と言って昼間はいつも眠っているわけではない。朝からアルファンブラ宮殿をまわってコルドバへ行かなくてはならない。

ポルトガルへ行く途中、セヴィリアの祭を見物するのが出発前からの楽しみの一つだった。アルファンソ家の貴族が集って、乗馬姿やあでやかな衣裳で街をかける様は、さすが太陽国のスペイン、色彩豊かな衣裳は目を見はるものがあった。

リスボンで一泊の後スペインへ逆もどり、首都マドリッドに着く。ここのプラド美術館は誠に立派だ。ゴヤ・ルーム、ベラスケス・ルームと分けて作品を紹介しているのは気持が良い。特にベラスケスのための部屋は立派な鏡の中に大作を写しだしている。

マドリッドから七〇キロ離れたトレドへエル・グレコを追った。クレタ島で生まれ、イタリアで修業したグレコが何故トレドへ移り住んだのか？

過去のスペインはともかく現在のスペインは全く貧乏な国である。茶色い岩肌の見えた山道にオレンヂを観光客に売りつけている子供達の姿、近代的な工場はなくフィゴで金細工を作る家内工業、そこには百年の歴史が静

止したまま移り来たとしか考えられない。

丁度街角で東京の研究会の一人の先生に出合う。リーダーが柳宗理先生だと聞いてグレコの家まで会いに行くことにした。昨日私たちのグループの先生が「グレコの家で徳大寺公英君に会って驚いちゃったよ」といわれていたがグレコの家は出会いの家のようだ。旅の疲れか柳先生は御気嫌が悪く、学生時代の先生のイメージをこわされたのは残念だったが、あちこちで懐旧の話が交わされているのは旅ならではのことであった。

ロンドンに来てまず驚いたのは大英博物館ナショナルギラリーが無料であるということだ。確かに展示されているものは英国人のものがないといっても良いほどエジプト、ギリシヤ、支那等、外国のものばかり、それも傑作ばかりである。大英帝国はなやかなりし頃に略奪して集められたものとしても無料ということはほめられてよいことだ。外貨の少くなっている頃だけに、余計印象が深い。日本の浮世絵が支那の中に入れられてひっそりとしている。「どうして支那の中に入れるのか」と聞いたところ「日本の文化は支那から来たじゃないか」と回答されたのはおどろきである。観光客も多いが携帯用の椅子をもって来てたん念に模写をしている。たくさんいる守衛達も観客の中に静かにまぎれこんで作品の場所案内も親切で頭が下る。特に博物館のそばに図書館を併設し、そこで研究を一層しやすくしていることなど日本でもまねてほしい。そしてその図書館で小学生まで話声もたてず勉強している光景は紳士の国の躾である。

ミニスカートの丈の短いのにもびっくりしたが、乗合タクシーの正確さはどんなわかりにくいところでも正確に行ってくれる。この度の旅行した国々で一番安心して過ごせた国だ。あり金が殆んどなくなったロンドンからは面白いほど絵が描けてくる。金のない貧乏旅行も後から見れば、よかったと思うが実際お金がなくなってしまったことはつらかった。大英帝国の苦しみも同じだろうか？

アムステルダムは北のベニスといわれているがベニスのような情緒がない。何故だろうと思ったところ、運河の側に道がある。オランダの運河は交通機関でなく、水の汲み出しとしての役目が先にたっているから当然のことながら舟唄一つ聞えないわけである。

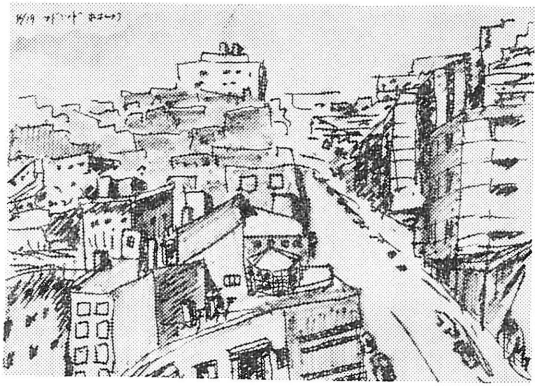
国立博物館へレンブラントの作品を見にゆく。道中タクシーの運転手がレンブラントの絵と同じ帽子を冠っている。

ショーウインドーの装飾は最高のできばえで色彩によってまとめたり、わけたりして色が今もなお焼きついている。それにひきかえ、近代美術館へゴッホを見に行ったが近代作家の中で押され、もまれた如く淋しい思いである。

パリに着いた時、シャンソンを歌っているような雨が降っていた。パリは日本人の町とでも言える程、空港には日本人が多かった。日本人の出迎えに来てもらう程やぼなことはない。たちまちシャンソンのような雨は日本語のどしゃぶりにあって、あっけなく消えてしまった。

パリは物価が高く暮しにくい町だ。文なし

の状態で家へ電話をかけたがホテルの手数料がイタリアではいらなかったのに十八フランという。千二百円余りになる。チップの受け取り方も何か人を馬鹿にしたような、全く利己的な国民だ。しかし美人の代名詞のように



いわれるだけあってパリジェンヌは全くすばらしく美しい。ミニは姿を消し、マキシが全盛をきわめていた。子供を連れた母親は子供に地味な服を着せ、母親の服を一層きわだたし持っている傘の色にまで気を配っている。

ルーブル美術館は死んでも見に行かねばと出かけて行ったが、一週間かかって見きれないような美術館を半日程で見ようとするのだから所詮死にものぐるいでかけ足見学となってしまった。

近代美術館、印象派美術館、ロダン美術館をまわりレンブラント素描展、運よくマチス誕生百年展にかけこんだ時は足をひきづっていた。

オルリー空港で帰国の数分前主人の同級生である大塚泰弘氏に会ったのが、唯一の白城会員との出会いであった。

（昭和四十五年三月から四月にかけて西洋美術研究会ヨーロッパ研究旅行に参加して）

表紙

「テムズ河畔」

高原智子画

《俳句》

比叡山

山崎為人
（姫中四十六回）
俳誌「寒雷」同人

ものの影晩夏は暗き
蟻地獄

りんりんと青杉ふかき
深山蝶

僧眠るほかは真昼の
杉木立

水引草影曳いて晩夏を
かなしめり

鐘冷えて湖へ消ゆるよ
晩夏光

句集「幻花」より

オーストラリア遊覧記

柏尾　拓巳（西高18回）

オーストラリアのシドニーでの一年間の生活は期待した通りの素晴しいものであった。昨年日本では真冬の二月の下旬、シドニー空港に降り立った時、夏の盛りの強い太陽に照らされた地面からたち昇ってくる土や草のかおりを忘れることは出来ない。期待や不安の入り混じったあのような奇妙な興奮の感情を経験することはそう何度もないだろう。

ぼくは六九年二月から大阪外大での前期の二カ年を終えて、丁度一年間大学の先輩とオーストラリア青年商工会のスポンサーのもとに私費留学生としてニュー・サウス・ウェールズ州のマコーレー大学に学んだ。しかし私費留学といってもまったくの私費であり。大学での生活の側ら従事したいろいろな仕事は、学校での勉強と共に大いにぼくの経験と視野を拡げてくれた。

オーストラリアという国

オーストラリアは広大だ。世界最小の大陸といってもその大きさは米国本土とほぼ同大で、日本の二十倍に余る。一方人口はまたおかしな位少く、東京都のそれをちょっと上まわる程度で、その密度は一平方キロ当り一人ちょっとといううらやましさだ。とはいえ大陸の中央部から北西部にかけては無人に近い乾燥地で人口の90％は東岸中部のブリスベーンと東南岸のメルボルンを結ぶ線以東の大陸のほんの一角に偏在している。

約二百五十万人の人口をかかえるシドニー、メルボルンの二大都市の中心部は日本の大都市とさして違わない。交通渋滞も毎日あるし、雑踏の具合も日本と変らない。建っているビルや高速道路など日本の方がよっぽど立派ではないかと思いもする。しかし、一歩郊外へ出るや日本とのあまりの違いに目を見張らずに居られない。道路は郊外でも市城ならそのすみずみまで、また周辺都市や他州へ通じる道路もすべて広く、ぜいたくなほどの歩道を両側に備え、ほぼ百パーセント舗装されている。特に中上流住宅地域の道路を含めた住居環境はまったく目を見はらせるものがある。日本の一般住宅の平均3～5倍はあると思われる敷地、その中央部よりちょっと前寄りに平家のレンガ造りか木造のカラフルな家が並び立っている。二階以上の建物は住宅地域ではアパートを除いてほとんど見かけない。たいていのアパートも狭いながらもやはり芝生の庭でかこまれている。だから小供達にとって遊び場に困る、というようなこともない。児童公園らしいものもたくさんあったが、むしろ国立公園（と指定されているのだが、「ピクニックの森や川」といった方が分りやすい）その郊外をとりまくようにしてあちこちに散在する。そこへは土・日曜の休日や祭日に家族やボーイスカウトなどグループでやって来て、ピクニックや日なたぼっこみたいなことをしてゆっくりと時間を過している。

そんな住民全部がずい分の金持ちに見えるようなところを越えてもっと外へ出る。すると住宅地はほとんどなくなって、すぐ無人地域みたいなところになる。シドニーなど東海岸の南部は西岸海洋性気候区にはいっていたりして、一般に湿潤だからほとんどの無人地域は特別の地質の所を別にして、この国特産

のユーカリの樹に覆れ森になっている。何故農耕地にしないのかといぶかるのだが特に都市周辺は、第二第三次産業に労働力をうばわれて、生産性の比較的低い近郊農業に従事する労働力がないためらしい。シドニーから千キロほど北のクイーンズランド州都ブリスベーンと同じく千キロほど南西のメルボルンにいろいろな交通機関で行く機会があったが、この人口の一番稠密なはずの地域に（それでも日本人の眼からみたら「非超過疎」くらい）亜熱帯作物のバナナなどの他はほとんど農業らしい農業をみたことがなかった。羊や小麦のことは東岸に沿うオーストラリア・アルプスの山脈を越えて百キロほど内陸に入ったもう少し湿潤度の低いところから始まるらしい。この国の産業基盤である農業を一年間居てある程度心がけて旅行もしたのにほとんどお目にかかれなかったのだから、やはりこの国はずい分大きく、日本人の感覚では把えにくいということだろうと思う。

丁度今年の四月、一七七〇年のキャプテンクックの大陸発見を祝う国家的な二百年祭が催された。たった二百年の歴史である。イギリスの流刑植民地、自由移民地、連邦政府の成立、しかも英連邦の一員といった歴史的な生いたちがこの過少人口あるいは過大面積の悩みとともに今日のユニークな国柄を生み出しているように見える。

学生生活と仕事

オーストラリアに滞在中、生活上何かにつけ深く結びついていたのはマコーレー大学である。渡濠の条件はそこで自力の学生々活を営んでいくことであった。幸いその大学で丁度僕がやろうとする生活をすでに一年以上も続けていた大学の先輩が僕の渡濠後、彼が二カ月ののちに帰国するまでいろいろ世話をしてくれた。彼のこころみた一部始終をだいたい理解していたし、スポンサーとのコンタクトからも学生生活および仕事に関する不安は別になかった。しかし手もとにあるのはアルバイトの蓄積とオヤのスネ毛の見えるひと握りの金だけ。物価や授業料のバカに高いその国では持ち込んだ金などあてにならない。仕事探しは、かくて到着の翌週から始まった。

ちょっと特殊な、しかも強力な一時滞留のビザがスポンサーの尽力のおかげで与えられていたので、僕の立場は極めて自由であった。観光ビザで渡米して大学に入ろうとするような者の心配もなく、ステューデントビザのためこっそりとアルバイトを探したりする必要もなかった。移民局関係には大学入学の許可をとっていた午前在学の報告の義務はあったがそれくらいのもので、大学のアルバイトのあっせんはもちろん職安のサービスも受けられるし、その上大学では変な留学生ということでいろいろ親切にしてくれた。日本人学生が極端に少いこの国では、近年とみにクローズアップされているわが日本国の国民にはほとんどの人が並み並みならぬ興味をもっていた。

仕事は最初電気メーカーのプロセスワーカーすなわち工員を二カ月、大学の化学部研究室のアテンダント則ち使い走りを三カ月、そして残りをオーストラリア翻訳者協会や日本領事館などからまわってくる翻訳や通訳、また日本語の家庭教師や宣伝フィルムの解説、テレビ番組のダビング等々頼まれる面白いことは大ていやった。オーストラリアンイングリッシュは大学や高校で習ったものも当初全然助けにならない感じであったが、数カ月経ち半年経つうちにだんだん不便はなくなった。

大学のコースはそのような仕事や生活上の慣れの点から後期に重点をおき一年を通して経済、後期に歴史とコンピューターを加えて

平均的パートタイムの学生となった。後期にはそんな少々フリーランサーめいた仕事のおかげでずい分楽になった。しかし仕事と学校の時々の事情である時には宿題も長らく出来ず、ある時には財政ピンチに陥いりまるでシーソーの上を右に左に走り回っているようなものであった。後期のシケンが終ってほっとした時、わが財政の方は完全に破産していた。

オーストラリアの大学は三月の初めに始り十一月の末に終る。グリーンクリスマスは夏休みだ。シケンの済んだ翌週積る仕事をたずさえて友達のポンコツ車にのり込みはるか千キロかなたの北のブリスベーンへフーテン旅行に出発した。遠々と続く太平洋岸に沿って走るので昼間は行く先々のビーチで毎日泳いだり日光浴をしたり持参のカヌーを漕いだりしてホリデーを満喫し、夕方涼しくなると車に乗り込みその夜の泊り場所を求めて北に向った。途上、ニューサウスウェールズ州と北のクイーズランド州の境にゴールド・コーストという保養地がある。ここはアメリカ資本で開発されたというだけあって、アパートの呼び方も一般英国式のフラットでなくアパートメントハウスであり、道路の名前もヤンキー式の5thアベニューなどとなっている。野外のメリーゴーランドもある。一般のオーストラリア人はどうか知らないが同行の双生児で両方とも大学院生のインテリのジョンハリーはまるでいやなものを見たといわんばかりにヤンキー式を悪しざまにいう。アメリカのベトナムでの「共産主義者退治」に「賛成」する彼らがそういうのだからずい分分りにくい。彼らはシドニーから二百キロほど西の地方都市カトウンバの農家の出身であり、そのような田舎出身者に共通の強度な政治的保守性や宗教心の強さを持っている。教会に毎日曜出かけるのも都市育ちのものより、内陸部の農場から出て来た者の方がはるかに多いように見うけた。

われわれの最初のプランでは寝袋を用いることになっていた。ところがそれらは車の屋根の上にくくりつけたカヌーの中に入れておいたところシドニーからニューカッスルの最初の百マイルほどの間のどこかへ全部落してしまい、最初の晩からあり合せの毛布や布切れに身を包んで寝るはめとなってしまった。海岸の近くの草地は蚊とハエがやたら多く、昼間はハエ、夜には蚊の大群が恰好の獲物とばかり飛びついて来る。ハエの方はひどい時にはうっかり大きく口をあけると中まで入り込んでくるぐらいで白いセーターの背中がネットのシャツみたいに斑模様に見えたりするのもめずらしいことではない。蚊の方も大きくて強力でズボンの上からでもチクリとやる。それでもこの国は検疫のことは相当うるさいので衛生上の心配はない。夜、毛布の端から顔を出して蚊の攻撃をかわしながらのぞいた夜空は空気の透明度の大きいせいか雪国の晴れた夜空のように星くずでうずまり、心なしか少し変形して見える夏のオリオン座や天の川の美しさはたとえようがない。実際あのような恰好でオーストラリアの夜空を幾度となく眺めると初めのしんみりした感じもなくなって一種のおかしさが湧いて来た。

この紙面を借りて櫛橋先生やその他の先生方に渡濠に際してもいろいろお世話になったことをお礼申し上げます。

母校教職員の異動

（昭和四十五年）

○離任された先生

お名前	教科	在勤年数	ご転出先
横林輝美治	教頭 生物	2	県立香住高校校長
長谷川隆吉	国語	24	賢明女子学院
玉木平三郎	国語	21	播磨高校
内海　貞夫	英語	2	国立明石工専
黒塚　悦子	主事	22	県立姫路東高校

○来任された先生

お名前	教科	前任校
原　八郎	教頭 社会	県立八鹿高校
宇野　新次	英語	県立神崎工業高校
小谷　篤	国語	県立上郡高校
小松　孝	国語	県立竜野高校
塚田　喜庸	体育	県立上郡高校
坂田　茂子	主事	県立姫路東高校

母校を去るに当って

長谷川隆吉（姫中40回）

「西高とともに二十二年」の一教師としての私の生活がはじまったのは、正式には東西西高校が誕生した昭和二十三年七月一日からである。しかしそれまでにも私は、折半交流の時の県女側の委員の一人としてその陣痛にまで立ち会った。さてこうして母校の教師となった私は、その後学年主任長（三回生、六回生、九回生、十二回生）として十二年、引き続いて部長（管理、生徒指導、教務）として十年の計二十二年間、しかもその間、故大西正一先生のご転出後は同期のゆえをもって代わって白城会の校内理事として名を連ね今日に至った。この間校長は、飯野、賀集、竹浪、小島、井内、林の六先生、みなそれぞれの角度から私の存在を認めて下さった方ばかりである。ところでこのたび、私は満五十八歳を迎え三十七年間の公立学校での勤務を終えることになった。

母校でのこの二十二年間の生活は。功罪はともかく私にとってはなにかにつけて、実に感慨無量、今そのすべてをここに書き尽くすことはできない。しかし編集子の求めに応じ、私なりの立場で思い出の種となる事柄のせめて項目だけでも以下列挙する。西高になってからの卒業生の方は、これによってそれぞれの立場で思い出の種とし、また姫中時代の卒業生の方は、戦後の母校の歩みを推察する材料にしていただければ幸いである。

○思い出の種あれこれ

・男女共学の発足と授業風景・校名、校章校旗、校歌、校訓の制定・白城会の発足・校地校舎の整備、全面改築・白城会館建設・学区制・七十周年と九十周年の式典・記念祭行事（デコづくり、仮装行列、ファイヤーストーム）・修学旅行・マラソンの球技大会・生徒会、クラブ、ホームルーム活動・商業科の併設と独立・補習、模試、進学・東西対校マッチ・参観者の激増・他校の紛争と西高

さいごにもう一言、「一介の教師としてではあったが西高に勤めていてよかった」の思いは、「一介の教師としてであったればこそ……」となり、このため優秀な教え子（同時に同窓となる方）を数多く持つことができ、また現職（市内の賢明女子学院高校部教諭）にもスムースに移れたのではないかと心から感謝している。この上は今までの体験に基づき、斯道のため、また校外にあって母校や白城会のためにも微力を尽くしたいと思う。

（四五、六記）

西高の想い出

玉木平三郎

西高を去って、わずか三月ほどしか経っていないのに、長い西高での生活が不思議と遠い昔の出来ごとのような気がする。それは、いかに望んでも、もはや西高は永久に近づくことができない離れた存在となったからであろうか。西高を去った諸先生が異口同音にいわれたことは「西高を去ってみてはじめて西高のよさがわかる」ということであった。何度となく聞いたことばであったが、少しも実感として感じられなかった。しかし今、それが身にしみて感じられる。思い出は美しい。過去の充実した時間が思い出の中に鮮明に浮かび上がってくる。かくすでに過ぎ去ってしまった過去の充足がはっきり自覚されるにもかかわらず、どうしてその時は恵まれているものが意識されず、不足だけが意識の上に上っていたのであろうか。人間はいつも現にもっている幸福感は自覚されないで、不足だけが自覚されるようにできているのかもしれない。今過ぎ去った二十年余りの歳月をふり返ってみると、私はほんとうに幸せであったと思う。私が私なりに乏しい才能を堀りあて、生の充実感を味わい得たのも、陳腐ないい方かもしれないが、西高のおかげである。西高での生活、それは一口にいって試験問題の作成と採点とに追いまわされた生活であったといってよいかもしれない。しかしその問題作成と採点とこそ、私を成長させ充実感をもたらした大きな要素であった。何の抵抗もなく問題が出来上ることなど一度もない。期日は迫る問題は出来ない。何とかしなければと切羽つまったところに追いこまれてはじめて出来上る。ほっとする間もなく答案が山積みされる。休む暇がない。間断なく「いのち」が活動しつづける。この「いのち」の動きが私を鍛え、「生きている」という充実感を与えてくれたものと思う。しかしその半面、やりたいと思うことも思うようにできない。大切な時間をやりたいこともやれず無為に過ごしてしまうことの空虚感が、不平となってぼやきも一言いってみたくなる。一つのものが充足されれば、他のものは犠牲にされる。犠牲にされた不足が強く意識の上にでてくると不平となって愚痴の一つもいいたくなるのが人情かもしれない。

しかし今は、不平、愚痴は影をひそめ、充足感のみが自覚され、しみじみとしたなつかしさだけが感じられる。

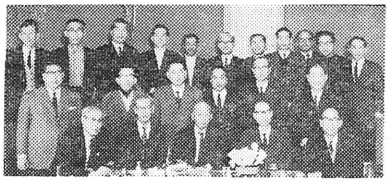
私が私なりに何かを把握し得たのもたしかに西高のおかげである。一流の人となるには一流の人と交わらなければならないといわれている。私は勿論一流の人ではないが、かけがいのない「いのち」をよき環境の中に生かさせて頂いた私はほんとうに幸せであった。しかし再びその機会にめぐりあえぬことを思うと何としてもさびしい。

姫中・西高・野球部
ＯＢ会開催お知らせ

校友の諸兄お元気ですか、恒例の白城会の総会が近づいてきました。われわれは昨年に続き三月一日母校白城会館に参集し青春時代を想い浮べ林校長長老栗田先生、芥田先輩を迎え小生の司会で年次順に自己紹介から始り、最後に作詞者の栗田先生の音頭で、『鷺山に秋の夜はふけて』を合唱して愉快に再会を約し散会しました。諸氏がこもごも語るのは、野球のことばかり、特に栗田先生が早大野球部を招待したこと、芥田氏が早大への入学の動機、正選手になる時のこと。山本氏が選手のスカウトした苦心談、釣氏、長尾氏が春の選抜大会出場時のエピソードこの時のエール交歓会に唱う校歌がなく応援歌で間に合わせた柴垣先生の話、集った諸兄は学生時代に野球をやってよかったな!!との感でした。その席上、小寺沢氏から亡き球友の追悼会を開催してはとの動議があり、丁度東京の足立氏から東西合同でとの連絡があり準備期間も短かく不十分だと思いますが、この際西高野球部Ｏ・Ｂの方々にも合流していただきたく思いますが、手が出ませんので、紙上をお借りして左記のとおり開催致しますから、ご案内に替えさせていただきます。是非共ご参集下さい。（写真は前回の参加者）（塩見記）

記

一、日時　昭和四十五年八月十六日
　　（日曜日）九・三〇分集合）
一、場所　姫路西高校グランド及白城会館
一、行事　Ｏ・Ｂ対現役（Ｏ・Ｂの紅白戦になるかも分りません）
　　一〇時～一二時追悼式
一、会費　一、五〇〇円



〔前列左から〕
芥田(33)水田(27)栗田(13)林(37)釣(48)
〔中列左から〕
塩見(49)黒坂(47)長尾(49)豊田(47)渡辺(48)小寺沢(46)
〔後列左から〕
田中(41)山本英(41)柴垣(43)鍛治川(47)西川(51)先水(47)和田(51)本間(48)岸本(51)中塚(50)山本章(51)

—紹　介—

尾田龍
『アフリカスケッチ』

姫中三十六回卒で、長く西高の教諭として美術の指導しておられた尾田先生が画集を出された。

一昨年アフリカの東部タンザニアを中心に多くのスケッチをして来られたのが一冊にまとまったのである。スケッチブック風のしゃれた麻地の表紙を開くと地図がまず楽しい。ゾウやシマウマ、踊る土人の姿などが描き込まれた先生自作の地図である。内容は二十枚の、人物を中心としたスケッチ。（内二枚は色刷）五百部限定の内、一番より三十番までには水彩画、三十一番より六十番までは素描が挿入されている。描かれた人物は精悍そうな政党議長や堂々たる貫禄の連合婦人会長から、子を背負い編物をする母親や、子供達など、さまざまだ。この地ではモデルになることをひどく嫌うらしいが、先にこのタンザニアに渡り、現地人に洋裁などの指導をしておられるお嬢さんの力もあり、かくも多くの人物が集められたのである。

昭和四十四年度白城会総会報告

昭和四十四年度「白城会」総会は八月十七日午後四時より、母校の白城会館で盛大裡に開催されました。集う会友百二十名。地元、県内は勿論、遠く東京、中京方面からも出席して頂き、空地理事長開会の挨拶に続き、会員物故者の霊に厳粛な目祷をささげた後、議事に移り会務、会計の報告並びに承認等なされました。その後愈々本年総会の華、桂米朝師（姫中五十四回卒）の談話、流石斯界の重鎮、巧な話術、聞く者、咳一ツだに無く、皆なの眼は逆放射線状に米朝師に集中、かと思えば当を得たウィットで爆笑、総会議事途中に起きたハプニングでの、やや重苦しい空気も吹き飛ばして、同じ学び舎で学んだ同窓の心の一致点をみつめました。

宴ともなれば、老は互いにその寿を喜び、壮はその健勝を称え、若きは時を論じ、想を錬り、夫々同窓の絆に結ばれて、胸を開き、飲物も十二分に廻り参加者一同満足して頂きました。この会のため祝辞、祝電等寄せて下さった方、特に会の運営進行に献身的にご協力、ご尽力頂き「白城会」健在なりの意を強く示して下さった方々、陽になり陰になりご協力頂いた母校の先生方に紙面を借りまして厚く御礼申し上げます。これらの方々の情熱、母校愛、力が私達の「白城会」を強く強く支えてくれております。紙面の都合上細い報告はできませんでしたが、これをもって総会報告にさせて頂きます。

昭和四十四年度白城会諸会計報告

（自昭和四十三年八月十一日
至昭和四十四年七月三十一日）

一般会計

収入総額	二、六六三、〇七四
支出総額	一、二〇九、九三〇
残額	一、四五三、一四四

白城会館運営会計

収入総額	一三七、四八七
支出総額	二九、六三八
残額	一〇七、八四九

会館建築特別会計

収入総額	七五四、五六八
支出総額	三八、三一五
残額	七一六、二五三

上記監査の結果正当なものと認めます。

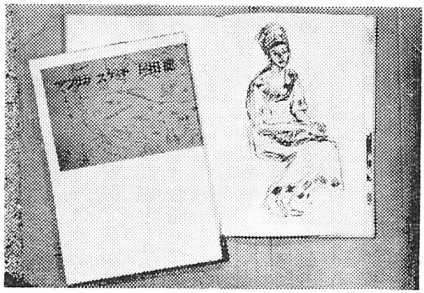
監査　岡本徳治郎
監査　竜田謙三

以上の通り報告いたします。

理事長　空地純一

先生のアトリエを訪ねると、先のヨーロッパ旅行による作品が今なお制作されているが、それらの作品が先生の芸術的完成度を示す、あざやかな作品であるとすれば、これらアフリカの作品は、より闊達で逞しく、いわば先生のスケールの大きさを示す作品であるように思える。色も線も奔放な明るさに満ちている。それは先生のさらに大きな前進の結果なのか、それともアフリカという大自然のしからしめたものなのか、ぼくにはわからないが。

（鳩川記）



白城会総会ご案内

回を重ねる毎に、益々盛大になってゆく、私達、白城会の昭和四十五年度総会を左記の通り行ないますので、会員各位、互いにお誘い合わせの上、多数ご参集下さいますよう、ご案内申し上げます。本年も楽しい集いになるようにと念願いたしまして、左記の方々の談話を予定しております。

なお、準備の都合もあり、出席有無を本通信折込みの用紙で、八月七日までにご連絡頂ければ幸です。

記

日　　時　八月十六日（日）
　　午後四時～六時
受付開始　午後三時より
場　　所　母校内　白城会館（三階）
会　　費　八〇〇円
　（但し西高十九回～二十二回生は四〇〇円）
講　　師　芥田武夫氏（姫中33回卒・前近鉄球団社長　野球評論家）
（予定）　三木　正氏（姫中50回卒・前サンデー毎日編集長）

白城会「会員名簿」改訂出版!!

前回出版の会員名簿は残部も殆んど無く。且、昭和四十年度の発行で、その後の会員の移動等もあり、新名簿要望の声も高く。本部では愈々「会員名簿」の改訂出版に着手し始めました。つきましては、会員各位の絶大なご協力を頂き、できるだけ正確なものをと念願いたしています。本通信折込みの用紙にそれぞれ、ご記入の上、是非投函、ご連絡下さいますようお願いいたします。この用紙でのご連絡が正しい名簿作成の第一歩になりますので、必らずご連絡下さい。

また、各回幹事の方々も同期の方々の消息を本部まで、ご連絡頂ければ幸いです。

「新名簿」の刊行!!

本部までどんどん連絡しよう!!

「維持会費」納入についてのお願い

同窓会員の皆さん！会員の皆さん方から会費として一カ年に百円ずつ、三カ年分まとめて三百円を納入して頂く「維持会費」制を定めましてから満三年経過しました。

本年は第二回目の三カ年分（金三百円）を納入して頂く年になりましたので、同窓会の充実発展のため「維持会費」の納入をして頂きますようお願いいたします。同封の振替用紙で納入ご送金頂ければ結構です。

編集後記

人類の進歩と調和をテーマとする万博が開かれている一方では安保で騒がれ、公害・自然保護が大きな社会問題としてとり上げられはじめた一九七〇年。お粗末ながら第七号ができあがりました。

印刷費が、諸物価同様、毎年上昇の一途でこの白城会通信も頁数を減らすか、或は昨年までのアート紙の表紙の質を落とすかしなければならぬ運命になり、いろいろ議論の末、表紙を通常紙に変更した次第。御感想・御希望をお聞かせ下されば幸いです。

No.7　昭和45年7月
題字は空地純一氏
白城会本部
姫路市伊伝居678
（郵便番号670）
姫路西高等学校内
理事長　空地純一
編集人　橘　義康
鳩川晏弘
家永善文
印刷所
明輝堂印刷
姫路市総社本町81